

令和7年度 第1回
みんなの森 ぎふメディアコスモス運営委員会 審議概要

日時：令和7年11月10日（月） 13:30～15:30

場所：みんなの森 ぎふメディアコスモス 第一会議室

出席委員：8名 高橋委員、田代委員、デュア一委員、出村委員、松枝委員、川島委員、岩佐委員、藤本委員

（欠席委員：市來委員、蒲委員、北村委員、鈴木委員）

傍聴者：なし

＜議事概要＞

①委員長・副委員長の選出について

全出席委員の承認により、委員長に高橋委員、副委員長に川島委員を選任。

②令和7年度の運営状況と今後の予定について

（委員からの意見）

- ・図書館の座席予約システムがすばらしい。
- ・貸館イベントと合った特集を組むなど、イベントと館内の繋がりをつくっていくとい。
- ・機構改革で観光部局になっても、今回作成したコンセプトブックを掲げるべき。メディアコスに居心地よく集まっていることが、ここでの文化度の高さを見せつける観光の目玉になるはず。観光のミッションがあるからといって、観光を上に掲げるべきではない。
- ・岐阜市というのは観光に関しては高山とか白川郷などとは違う戦略をとらなければならないエリア。元々このメディアコスはサードプレイス、中心市街地の活性化など本来の図書館のスタートの役割をこえて、色々なものを背負っている。ここでさらに観光にまで引っ張られると、メディアコスとは何だという話がぐらつきかねない。観光とは地域の誇りや特色などの部分を観るのであって、産業としてのツーリズムに落ちてはダメということは間違いない。
- ・観光という部署が、というよりこのコンセプトブックにのっとって、観光とは何かを考えていくような学びがもつとここで醸成されるべき。
- ・税金で施設を運営していくというよりは、経済業界とのつながりを深め、行政と民間を繋ぐ施設というのも今後の担いの中にあるのでは。
- ・メディアコスは市の住民税で運営されており、主に市民のための施設でいなければいけない。
- ・メディアコスはみんなが集まって終わりの施設ではなく、集めた人に付加価値を付けて外

に outs 活動が盛ん。活動の種を与える、そして市に出て行って活動するのが最大の特徴。10年間ずっとそれが高まってきていて、観光資源としての投資のために、市民活動を犠牲にするのはもったいない。岐阜市はそれで得するかというと逆に損をするだろう。

- ・観光を打って出るから、そういうお金が生まれるように持っていくというよりは、この場所の良さが最も大事な資源であり、それは実はよりよい観光の資源にもなっていますというような、主・従の入れ替えをしてはいけない。観光事業とは何か、メディコスとしての答えは出すべきだ。
- ・暮らす人目線であってほしい。
- ・モーリー（みんなの森 ぎふメディアコスモス公式マスコットキャラクター）の着ぐるみを作つてほしい。
- ・10代後半の利用が少ないことについてイベントなどいろんな企画をして中高生・大学生が来るようになれば、その時は本を借りなくとも、施設に慣れていれば社会人になってからよく使うようになる。
- ・行政向け職員の図書館ツアーやいうのは素晴らしい考え。市役所として仕事中に図書館にちょっと行ってくるということを認めるべき。
- ・Yahoo のビッグデータから市民のために図書館の利用実態がより明らかになるためもう少し分析すべき。
- ・行政サービスも選択的になってきている。この施設を岐阜市民・岐阜市行政において、高い位置に置き続けていくことが大事。
- ・岐阜市は寄附を募るなどが最も苦手な自治体。他のまちはもっと企業を連携の中に巻き込んでお金もできれば出してもらうことをうまくやっている。岐阜市は公民連携プランを持っておくべき。
- ・ここにたくさんの知が集まっている。本がいっぱいある場所がある、そういう象徴的な場所且つ実用的である場所、しかも全国の図書館よりも非常に居心地がいいっていうその事実自身が核。屋根のある公園といつても、その中に本が無いわけじゃないというところ。ここが大事。
- ・読書は孤独と向き合うものもある。メディコスは華やかすぎて行けないみたいな子もいるのではないか。そういう子に対しても居場所になる方法を考えたい。
- ・市の体制として寄付の受け入れを整えるべき。照明の入替えなど寄附をする主体はある。
- ・市民活動も世代交代や世代が混合できるようにしないといけない。自然にはなかなか世代混合は難しい。メディコスの中なら混合できるのでは。
- ・多文化交流プラザでは、大規模災害が起きた時の訓練が実施されている。これはすごく重要。外国人向けだけではなく、災害に関することは部局を超えた全体として事業なり講座なりやっていくべき。
- ・イベントなどを継続していくこと、内容を更新していくにもマンパワーが絶対に必要。スタッフ数の増加について、ちゃんと考えるべき。